

中国の大学の日本語授業における 会話指導に関する調査

—中・上級レベルを対象とした教室活動の実態と教師の意識—

長坂水晶・木田真理

〔キーワード〕 中・上級会話指導、非母語話者日本語教師、中国の大学、教室活動、教師の意識

〔要 旨〕

本研究では、非母語話者日本語教師研修における、教授法授業の会話指導の内容を再考することを目的に、上級レベルの学習者を多く育成していることが特徴の中国をとりあげ、大学の非母語話者日本語教師が、どのようなことを目的に会話授業を行い、どのような教室活動を実施しているのか、また、どのような教室活動が、会話力向上に貢献すると考えられているのか、中・上級会話指導における困難点は何かなどについて、質問紙調査を実施し、結果の分析と考察を行った。

その結果、中国の大学では、暗記や翻訳、繰り返しなどの活動が頻繁に行われているものの、実際に頻繁に行っている活動と、会話力育成に貢献すると評価されている活動の間にはずれが認められた。また、日本人のものの考え方、敬語や語彙などの言語項目、学習者への動機付けや授業の仕方などが会話指導の難点としてあげられた。これらを踏まえて、訪日教師研修における支援内容への示唆を整理した。

1. 調査の背景

日本語環境にない海外において会話指導は、日本語教師にとって大きな課題のひとつである。とりわけ日本語を母語としない教師には、自身の運用力に関わらず会話指導は課題を多く含む分野であろう。国際交流基金日本語国際センターの教師研修に参加する非母語話者教師（以下 NNT）への受講希望調査からもこのことは読み取れる（阿部・横山2003：28）。ここで言う会話指導とは、初級から上級までを広く含めた内容を指すが、海外において NNT が特に問題意識を抱えていると思われるのが中級以上のレベルの学習者に対する会話指導である。

言うまでもなく、海外では日本人との接触や、生の日本語を取り入れる機会は限られている。その海外で中・上級話者を産み出している高等教育機関の教室現場では、どのような授業が展開されているのであろうか。具体的な教室活動とともに、会話力を伸ばす活動に関する教師の考えを探り、そこから、海外の現場で教育に携わる NNT をどのように支援していけるのか、再考する手掛かりを得たいと考えた。

本調査では中国の大学を取り上げた。日本語学習者の多さでは、中国は世界第二位である。

大学など高等教育機関で学習する者が5割を占め、中・上級レベルに達する学習者の割合が高いことが特徴である^①。同時に、ここ数年教授法への強い関心が「著しい変化として注目される」(阿部他：前掲)地域でもある。このような特徴を持つ、中国の教育現場の実情と教師の意識を明らかにすることを目指す。

2. 先行研究

海外の NNT の支援を目的として行った調査に、保坂・奥原・草野 (2008) がある。この調査では7カ国の NNT54名を対象に、使用教材の評価、ニーズについて質問紙調査を実施している。その結果、教材に感じている主な問題点として、「自然な、適切な表現ではない」「量が多い」「文法解説の説明不足」「練習問題が少ない」「ビデオ視聴覚教材の不足」が挙げられることが分かった。特に視聴覚教材へのニーズが非常に高く、授業を行う上での学習の動機付けと強く関わっていることを指摘している。しかし NNT と一口に言っても、その特性は地域や所属機関によって大きく異なることは先行研究からも指摘されており(木谷・坪山2000、久保田2009)、NNT のありようは注意深く分析する必要がある。

中国を対象とした研究では、冷 (2005) がある。冷 (2005) は、中国の6つの大学の教師と学習者を対象に、教室活動に対する教師の意識を調査し、「総合日本語(精読)」の授業では「文法の説明」「本文の説明」「単語の説明」「文法の練習」等の言語知識の説明や知識の定着のための教授活動が中心に行われ、それらを教師も学習者も役に立つ教授活動として評価していること、もっと時間をかけたい教授活動として「教科書以外の応用会話練習」があるが、よく行うのは「3分間スピーチ」「問答練習」であり、「討論」「ゲーム」など創造性の高いコミュニケーション練習は行われていない場合が多いことを明らかにしている。

こうした先行研究から、中国を含む海外で教える NNT が抱える教授活動に関する問題意識や課題が浮き彫りにされているが、具体的にどのような教室活動が行われ、それが教師の意識とどのように関わっているのか、教師たちは何を教えなければならないと考えているのかは、更に踏み込んだ調査が必要である。

3. 調査の目的

中・上級学習者を指導する中国の大学で日本語教育に携わる教師を対象に、次の点を明らかにすることを目的として調査を行った。

目的1：教育の現場において、中・上級レベルの学習者の会話力向上を目的にどのような教室活動が行われているのか。

目的2：どのような教室活動が中・上級レベルの学習者の会話力向上に貢献すると考えられているのか。

目的3：中・上級レベルの会話に関する学習項目として取り上げられるべきだと考えられている日本語の特徴は何か。

目的4：中・上級レベルの会話指導で何が難しいと考えられているのか。

4. 調査の概要

調査票作成にあたり、2名の中国人日本語教師に試作の調査票に答えてもらい、その後、回答のしにくさや調査内容に対する意見に関してインタビューを行った上で、本調査用の調査票を作成した。調査は次の要領で実施した⁽²⁾。

- ・調査時期；2009年7月
- ・方法；無記名の質問紙調査（選択・自由記述）（添付資料1）
- ・調査対象；中国の大学で日本語教育に携わる中国人日本語教師85名⁽³⁾

調査対象者の属性は下記の通りであった。

年齢：20代 29名、30代 36名、40代 16名、50代 3名、無記入 1名

教授歴：3年未満 17名、3年以上10年未満 46名、10年以上 22名

日本滞在歴：0－1年未満 59名、1年以上3年未満 17名、3年以上 9名

日本語学習歴：中国の大学 79名、日本の大学 3名、その他 1名、無記入 2名

教授対象者（複数回答）：大学での日本語専攻 73名、大学での第一外国語 10名、大学での第二外国語 18名、大学院での日本語専攻 2名、その他 4名

- ・調査内容；質問1と2では、中・上級学習者のための会話力向上を目的とした授業（以後会話授業と称す。ただし、精読の時間に会話指導を行っている場合なども含む）の有無、実施している場合の授業の概要（担当は日本人教師か中国人教師か、レベル、教材、日本語使用、授業の目標）を、質問3と4では、中・上級学習者のための授業（科目を問わず）における25の教室活動の実施の有無と、それらの活動が中・上級の会話力を伸ばすことに貢献していると判断しているかどうかを教師に尋ねた。ここでとりあげた25の教室活動は、会話力に関わると考えられる教室活動である。内容の種類から、次の5タイプに大別される。

タイプ1：インプットを中心とした活動（聞く・見る；1－3番）。

タイプ2：教材の本文や例文、素材となる日本語をそのまま繰り返したり翻訳したりする活動（暗記、音読、翻訳、リピート、シャドーイングなど；4－10番）。

タイプ3：学習した表現を用いた活動（発表、作文、ゲーム；11－13番）。

タイプ4：読んだり聞いたりした内容を再生する活動（要約、ディクテーション；14－17番）。

タイプ5：自由度の高い活動（会話文作成、ロールプレイ、インタビュー、スピーチなど；18－25番）。

タイプ1～3は、伝統的に教室で多く取り入れられていると思われる活動である。タイプ4はもとのテキストを利用することにより、学習者の認知比較を促す活動で、話す相手がいない、あるいは日本語を使う環境にいなくても行いうる産出活動である⁽⁴⁾。タイプ5は場面や状況に合わせたコミュニケーション活動や自分の考えを自由に述べる活動である。

5. 調査結果

5.1 中・上級学習者を対象とした会話のための授業実施の有無

所属機関において、中・上級学習者を対象に、会話力向上を目的とした授業が行われているかどうか調べたところ、85名中74名が、会話指導のための授業があると答えている（添付資料1 アンケートの質問項目（1）、（2）参照）。

教師や使用言語など、授業がどのように行われているのかを尋ねた結果を表1にまとめる。

【表1】授業の概要

授業を担当する教師	中国人 22名	日本人 66名
対象としているレベル	中級 67名	上級 11名
教師の日本語使用	教室活動の指示 57名	文法などの説明 51名

会話授業に当たっているのは、多くが日本人教師であることがわかる。また、中級レベルを対象とした授業が中心に行われているようである。また、中・上級レベル対象の授業でも、教室活動の指示を日本語で行わない教師もいることがわかる。

会話授業の目標を記述してもらい、多かった回答順に主なものを挙げると、次のような結果になった。ビジネスなど卒業後の仕事で日本語を使えるようになること（25名）、日常会話ができるようになること（23名）、自由に流暢に話すこと（16名）、日本人とのコミュニケーション（10名）、学んだ知識を運用して話すこと（10名）であった。

ここからわかることは、会話授業において仕事や日常での実際のコミュニケーションにすぐに役立つような日本語力を身につけることが目標となっており、実用志向が強いことである。

5.2 会話授業で行われている教室活動

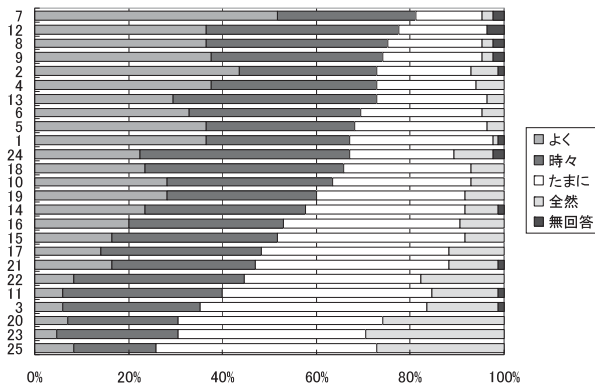
中・上級学習者を対象にした授業⁽⁵⁾で、会話力に関わる活動をどのぐらい行っているのかたずねた（添付資料1 アンケートの質問項目（3）参照）。「よくする」「時々する」「たまにする」「全然しない」のうち、当てはまるものを選んでもらった。「よくする」か「時々する」と答えた人の総数が多い順に並べた結果を表2に示す。タイプ2「繰り返しや翻訳が中心の活動」（4～10番）はゴシックにし、タイプ3「学習した表現を利用した活動」（11～13番）には下線を付け、タイプ4「素材を再生する活動」（14～17番）は太罫線で囲んである。また、タイプ5「自由度の高い活動」（18～25番）は網掛けにしてある。表2の結果を割合で示したの

中国の大学の日本語授業における会話指導に関する調査

【表2】会話授業で行っている教室活動

番号	活動の内容	よく	時々	たまに	全然	無回答
7	学習者が日本語の会話文を音読する。	44	25	12	2	2
12	学習者が学習した表現を使った文を口頭で発表する。	31	35	16	0	3
8	学習者が日本語の会話文や表現を暗記して発表する。	31	33	17	2	2
9	学習者が日本語の会話文を中国語に訳す。	32	31	18	2	2
2	教師が会話文や例文を日本語で何度も読んで聞かせる。	37	25	17	5	1
4	学習者が日本語母語話者の発音にできるだけ似せて単語や文を言う練習をする。	32	30	18	5	0
13	学習者が学習した表現を使って短い文を書く。	25	37	20	3	0
6	学習者が日本語音声聞き終えてから、繰り返し。	28	31	22	4	0
5	学習者が日本語音声聞きながら、ほぼ同時にあるいは少し遅らせて、できるだけ正確に繰り返す。	31	27	24	3	0
1	学習者が会話やニュースやドラマなどを日本語で聞く。	31	26	26	1	1
24	学習者が原稿を作ってスピーチをする。	19	38	19	7	2
18	学習者が自由に日本語で会話文を作り発表する。	20	36	23	6	0
10	学習者が中国語の会話文を日本語に訳す。	24	30	25	6	0
19	学習者が日本語でロールプレイ(状況と役割を与えられて話す活動)をする。	24	27	27	7	0
14	学習者が日本語で読んだり聞いたりしたものの内容を口頭で要約する。	20	29	29	6	1
16	学習者が日本語で書かれた文章を読み、その要旨を日本語でまとめて発表する。	17	28	32	8	0
15	学習者が日本語を聞きながらメモを取り、それに言葉を補って聞き取った内容を日本語で発表する。	14	30	34	7	0
17	学習者が、聞いた日本語を正確に書き取って発表する。(ディクテーション)	12	29	34	10	0
21	学習者があるテーマについて日本語で意見や感想を述べたり説明や報告をしたりする。	14	26	35	9	1
22	学習者が絵や写真や物について口頭で日本語で描写したり説明したりする。	7	31	32	15	0
11	学習者が学習した文法や表現を利用したゲームをする。	5	29	38	12	1
3	学習者が授業中に日本語のテレビや映画を見る。	5	25	41	13	1
20	学習者があるテーマについて日本語でインタビューする。	6	20	37	22	0
23	学習者が漫画やドラマのせりふを考えて日本語で発表する。	4	22	34	25	0
25	学習者が原稿を作らずにスピーチをする。	7	15	40	23	0

【グラフ1】実施している活動



がグラフ1である。

今回の調査では、タイプ2の活動(表2のゴシック)、すなわち学習者の発話の自由度の低い、音読、翻訳、繰り返し、暗記、聞き取りなどが上位を占めていることが分かった。まず、8割以上の教師が、会話文の音読(7番)を授業で「よく・時々」実施しているのをはじめ、暗記や繰り返しの活動はいずれも7割程度と実施率が高い。ただし、その中では日本語への翻訳(10番)は6割程度とやや下がる。

また8割近くの教師が、学習した表現を使った文を口頭で発表させる活動(12番)を「よく・時々」実施している。同じくタイプ3の活動(表2の下線)である、短い文を書かせる活動(13番)も約7割が実施している。ただし、同じように学習した表現を利用する活動でも、ゲーム(11番)では「よく・時々」と答える教師が4割程度に下がることが分かった。

学習者の考えや意見を表す自由度の高い活動(表2の網掛け)で、上位を占めたのは、原稿を用意するスピーチ(24番)、自由な会話文作成と発表(18番)、ロールプレイ(19番)で、いずれも6～7割の教師が「よく・時々」実施すると答えている。それ以外の、意見・感想・説明・描写などの発表(21、22番)、インタビュー(20番)、ドラマのセリフの発表(23番)、原稿のないスピーチ(25番)は、半数を超える教師が「あまり・全然」と答え、頻繁に教室で行われる活動ではないことが分かった。このことは、冷(前掲)の調査で得られた結果と一致する。

タイプ4の、聞いたり読んだりした素材の内容の要約や再生を行う活動(表2の太罫線)は、いずれも5～6割の教師が「よく・時々」行っており、活動による頻度の違いは大きくなかった。

これらの活動は、学習者に認知比較を起こさせ習得を促進する活動と言えるが、中国の大学における授業ではインタビューやスピーチなどの自由度の高い活動と比べると、比較的によく行われる活動であることが分かった。

タイプ1の、インプットを中心とした活動(1～3番)では、最も実施率が高いのは、教師が何度も読んで聞かせる活動(2番)だが、テレビや映画を見る活動(3番)は4割に満たない。漫画やドラマのセリフを日本語で発表する活動(23番)を「よく実施する」と答えた教師の数が非常に少ないことから、映画や漫画などは教室で積極的に利用されていないことが分かる。

5.3 中・上級の会話力向上に貢献すると考えられている活動

5.2で取り上げたのと同じ活動について、会話力向上に貢献すると思うかを尋ねた(添付資料1 アンケートの質問項目(4)参照)。

中国の大学の日本語授業における会話指導に関する調査

【表3】 会話力向上に貢献する活動

番号	活動内容	大変	まあ	あまり	全然	無回答
12	学習者が学習した表現を使った文を口頭で発表する。	55	26	4	0	0
1	学習者が会話やニュースやドラマなどを日本語で聞く。	53	28	3	1	0
6	学習者が日本語音声聞きながら、繰り返す。	52	29	4	0	0
13	学習者が学習した表現を使って短い文を書く。	33	47	5	0	0
5	学習者が日本語音声聞きながら、ほぼ同時にあるいは少し遅らせて、できるだけ正確に繰り返す。	50	29	5	0	1
14	学習者が日本語で読んだり聞いたりしたものの内容を口頭で要約する。	51	27	6	0	1
8	学習者が日本語の会話文や表現を暗記して発表する。	51	26	5	2	1
15	学習者が日本語を聞きながらメモを取り、それに言葉を補って、聞き取った内容を日本語で発表する。	49	28	8	0	0
7	学習者が日本語の会話文を音読する。	45	32	5	3	0
21	学習者があるテーマについて日本語で意見や感想を述べたり説明や報告をしたりする。	55	19	10	0	1
19	学習者が日本語でロールプレイ（状況と役割を与えられて話す活動）をする。	52	22	9	2	0
18	学習者が自由に日本語で会話文を作り発表する。	51	22	11	1	0
22	学習者が絵や写真や物について口頭で日本語で描写したり説明したりする。	44	29	12	0	0
16	学習者が日本語で書かれた文章を読み、その要旨を日本語でまとめて発表する。	41	32	12	0	0
4	学習者が日本語母語話者の発音にできるだけ似せて単語や文を言う練習をする。	40	33	10	2	0
17	学習者が、聞いた日本語を正確に書き取って発表する。（ディクテーション）	40	32	12	1	0
2	教師が会話文や例文を日本語で何度も読んで聞かせる。	31	38	16	0	0
20	学習者があるテーマについて日本語でインタビューする。	43	25	15	2	0
24	学習者が原稿を作ってスピーチをする。	34	34	16	1	0
23	学習者が漫画やドラマのせりふを考えて日本語で発表する。	33	34	16	2	0
25	学習者が原稿を作らずにスピーチをする。	47	19	17	2	0
11	学習者が学習した文法や表現を利用したゲームをする。	26	39	16	4	0
10	学習者が中国語の会話文を日本語に訳す。	24	41	19	1	0
9	学習者が日本語の会話文を中国語に訳す。	20	38	24	3	0
3	学習者が授業中に日本語のテレビや映画を見る。	18	36	28	2	1

【グラフ2】 貢献する活動

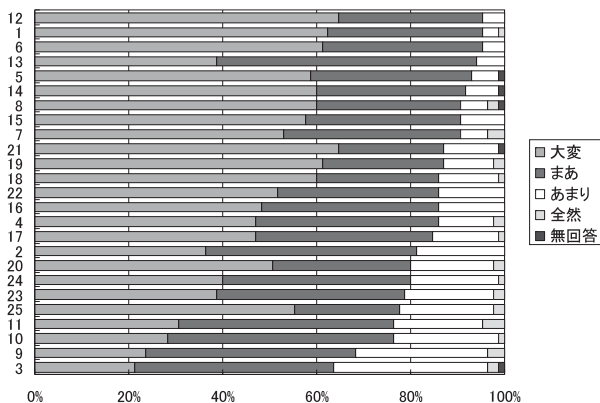


表3は、「大変貢献する」または「まあ貢献する」と答えた人の総数が多い順に並べた結果である。表2と同様にタイプ2「繰り返しや翻訳が中心の活動」(4～10番)はゴシックにし、タイプ3「学習した表現を利用した活動」(11～13番)には下線を付け、タイプ4「素材を再生する活動」(14～17番)は太罫線で囲んである。また、タイプ5「自由度の高い活動」(18～25番)は網掛けにしてある。表3の結果を割合で示したのがグラフ2である。

今回の調査では、項目にあげたほとんどの活動を、6割以上の教師が「会話力向上に大変貢献する」または「まあ貢献する」と評価した。また、教室活動としてよく取り入れられている活動と、会話力向上に貢献すると評価されている活動の順位は、必ずしも一致しないことが分かった。以下で具体的にデータを見る。

よく実施しており、かつ大変貢献するものとしても評価が高いのは、学習した表現を使って口頭で発表する(12番)、会話やニュースやドラマを日本語で聞く(1番)、聞いた日本語を同時に／聞き終えてから繰り返す(6番、5番)といった活動である。なお、学習した表現を使って短い文を書く活動(13番)は第4位で、9割以上と評価が高いものの、「大変貢献する」と答えた教師の割合は4割程度である。

タイプ5「自由度の高い活動」(18～25番)(表3の網掛け)は、全体に実施率が低めだったが、どの活動も8割以上の教師が会話力向上に「大変・まあ」貢献すると考えている。特に、意見や感想を述べたり説明や報告をしたりする活動(21番)は「大変貢献する」と答えた教師の数が最も多い活動の一つであった。また、原稿を作らずにスピーチする活動(25番)は、自由度の高い活動の中では貢献度の評価が一番低い、「大変貢献する」と答えた教師の割合が高いのが特徴的である。

タイプ2「繰り返しや翻訳」など自由度の低い活動(表3のゴシック)は、全体に実施率に比べて貢献度の評価の順位が低くなっている。特に「会話文を中国語に訳す活動」(9番)は、実施率の高さに比べ、貢献度の評価の低さが目立つ。また、教師が会話文や例文を日本語で何度も読んで聞かせる活動(2番)も実施率の高さと比べると、貢献度の評価の順位は低い。

一方、「よく・時々」実施すると答えた者の割合が低めで、かつ「大変・まあ」貢献すると答えた割合も低い方だったのは、日本語のテレビや映画を見る(3番)、学習した文法や表現を利用したゲームをする(11番)、学習者が漫画やドラマのせりふを考えて日本語で発表する(23番)といった活動であった。ゲームや漫画・ドラマ・映画などを利用した活動は、実施率も、評価率も、他の活動に比べると低いことがわかる。

5.4 中・上級の会話力向上のために学習する必要がある日本語の特徴

「中・上級の学習者が日本語会話力を伸ばすために、どのような日本語の特徴について学習する必要があると思いますか」と尋ねた(添付資料1 アンケートの質問項目(5)参照)。

自由に記述された回答の主な内容を項目化し集計した。

延べ数の多いものから挙げると、まず「敬語の使い方」「日本語のあいまいさや婉曲な表現」に関して記述した教師が16名と、もっとも多かった。（記述例1、2、3）

（例1）敬語表現、特に公共の場、職場での表現は、現在使っている教材にあまり反映されていないから、学生にとって大変難しいです。

（例2）日本語のあいまいさ、婉曲などの特徴を理解してもらう必要があります。

次に多かったのは、「日本人の心理・考え方・文化」（例3）「自然な発音、イントネーションなど音声に関する能力」（例4）「文法や語彙の特徴」（各13名）に関する記述である。例4にあるように、自然な音声を習得するためには、映画やドラマなどの利用が必要であるという記述が複数見られた。これらの素材の活用は、教室で実施している活動や、会話力向上に貢献する活動、とは違う観点から言及されたものとして、注目される。

（例3）日本語のあいまいさとか、日本人の良く使う言葉など、そして日本文化、日本人の性質などをよく理解しなければ、ただ日本語で話すのがぜんぜん足りないです。日本人の心をわからなければ、まだまだです。

（例4）（前略）ごく簡単な文で自分の言いたいことを表すのは普通なのです。その簡単で自然な日本語を身につけるために、ニュースやドラマなどを日本語で聞くのは、非常に役立つと思います。けど、授業の時間数に限られて、教材以外の内容をやる時間はあまり無いのです。ですから学習者が自分で余暇の時間を利用してそれらを見る（聴く）ようにしてもらった方がいいと思います。

続いて例5のような「場面や相手により使い分けられる表現」（12名）も、多く見られた回答である。

（例5）相手、場面などによって言葉づかいが違う特徴について学習する必要があります。

更に、男女の言葉づかいや、話し言葉と書き言葉の違いなど「言葉づかいの違い」（8名）や、主語などの「省略表現」（7名）、なども挙げられた。

このように上位に挙げられたことは、相手や場面に応じた表現の使い分けに関わるものであり、対人関係に影響を与える項目であることが分かる。これは、会話の授業の学習目標として、ビジネスや留学先など、将来学習者が出会うであろう場面で、問題なくコミュニケーションを展開することを多くの教師が挙げていたことと関連している。また、自然な日本語を身につけるという観点から音声に触れた記述も多く、そのための日本のテレビや映画などの活用に触れた回答が複数見られた。

5.5 中・上級の会話指導で難しいと考えられていること

「中・上級の会話指導においてどのようなことが難しいですか」と尋ねた（添付資料1 ア

ンケートの質問項目（6）参照）。自由に記述された回答の主な内容を項目化し集計した。延べ数の多いものから順に項目をあげたのが表4である。

【表4】会話指導の難点

順位	項目	人数
1	中国式の発想ではない、日本人のものの考え方	19
2	書き言葉や教科書で習ったのとは違う自然な会話の日本語	14
3	授業や指導のしかた	13
4	覚えた表現を実際に使って流暢に話すこと	10
4	文法や語彙などを正確に身につけて話すこと	10
6	意見・考えなどを話すこと	8
6	学習者の動機・意欲を強めること	8
8	授業に適当な教材や資料を見つけること	7
8	教師の日本語力	7

学習する必要がある日本語の特徴に挙げられていた「日本人の考え方」は、指導が難しい項目として1位になっている。また、日本語として自然な表現を教えることが難しいと感じている教師が多いことも分かる。

また、授業・指導の方法、学習者の動機や意欲を強めることや、適切な教材・資料の活用など、教室でどのように教師が指導するかに関わる

点が多く記述されていた。覚えた表現を実際に使い、自分の考えや意見などを話させることが難しいと感じている教師の姿もうかがえる。

また教師の日本語力に関する記述が8番目に多かった。2位に「自然な日本語」を教える困難があげられたことから、「NNT自身の切実なニーズとして言語運用力の向上がある」（横山2005：10）ことがはっきりと浮かがる。

6. まとめと考察

今回の調査から、教室の中では、伝統的な繰り返し、暗記、中国語への翻訳といった自由度の低い活動が頻繁に行われていることが分かった。一方、意見や感想を述べたり説明や描写を学習者が行ったりする自由度の高い活動は、それと比べて実施率が低くなっていることも分かった。

また、映画やドラマ、漫画といった素材を教室で積極的に取り入れる教師はそれほど多くなく、会話力向上に貢献する活動としても評価は高くなかった。徐（2008）が調査した3年制大学の96%の学習者は、教室外で日本のテレビドラマを楽しんでおり、ドラマ視聴を日本語学習につなげるための学習者支援の有効性、重要性が指摘されている。中国の多くの若い学習者にとって興味・関心のある素材が、教室活動にはまだ取り入れられていないことがうかがえる一方で、教師は自然な日本語の音声を身につけることは重要であると認識し、そのためには映画やドラマといった素材が有効であると考えていることも今回の調査から示唆された。ここにNNTへの支援が必要な側面が現れていると考えられる。

会話力向上に貢献すると考えられている活動についての調査では、自由度の高い活動に対する評価が高かったが、これは必ずしも実施率の高さと一致しないことが分かった。このことは、教師が挙げた会話指導での難点に関する記述に、「授業や指導の方法」が上位に挙げたことと関連付けられるだろう。効果があると思っている活動を、実際に教室活動としてどのように実施・評価するのかについて、困難を抱える教師が少なくないことがうかがえる。これは、中・上級の会話指導についての困難点に、教室活動の方法や、学習者への動機付け、意見や話題を広げて話させることなど、具体的な教授活動の技術に関わる事柄を挙げる教師が多いことから、教師が、効果が高いと感じている活動を教室に採り入れたいと思いつつも、実際に教室でそれを行う方法が分からなかったり、実施するための設備が十分でなかったりして、難しいと感じるためにあきらめている可能性があるだろう。

また、会話授業の目標の記述から、卒業後の就職先や進路などで役立つなど、実用的な日本語会話力を掲げる教師が多かった。このことと、会話指導で特に重要な点として「敬語」「場面や相手に即応した表現の使い分け」を掲げる教師が多いことは、強く関連していると思われる。

以上のような会話指導に関するさまざまな教師の取り組みや、問題意識を支えるのに必要なものとして、教師自身の運用力向上へのニーズが今回の調査からも読み取れた。

7. 今後の課題

今回の調査結果から、中国の NNT に対する支援に関して、次の点を今後の課題と考える。

まず、中国の現場の状況に合わせた、非常に具体的な形で教室活動を示し、その効果やノウハウを考える場を提供することである。具体的には、相手や場面に応じて適切に表現を使い分けたり、意見や感想など、自分が思ったことを述べたりする練習を教室活動に取り入れるには、どのような内容の活動をどのような方法で行うのかを考え、検討し、実践の場につなげる機会を教師に提供することである。

加えて、学習者の興味・関心に合わせた素材を利用して、日本語の表現と共に、ものの見方や考え方についても広く学習者に考えさせるような教材・活動を具体的に提供し、それらの授業への取り入れ方や、学習効果を実際に示すことである。特に映画やドラマなどの素材は、日本語環境にない海外で有効活用が期待されるものである。中国の学習者にとっても興味・関心がある素材である上に、昨今はインターネットの発達により、簡単にアクセスできる身近な素材となっている。映画やドラマは言語学習のみならず、既習項目の確認や、社会や文化的背景、ものの考え方について考えたり学んだりするために有効なものである。教師研修の場では、研修参加者にこれらの素材の効果的活用法や、学習方法・学習支援の具体的方法を考えたり、試したりする場を提供することで、教室の内外で活用する教師が増加することが望まれる。なお、

今回の調査結果からは、なぜ中国の大学の授業で映画やドラマが積極的に使われていないのか、なぜ「会話力向上に貢献する」との評価が他の活動に比べて低かったのか、その背景や要因を十分に探ることはできなかった。この点に関しては更なる調査が必要である。

また、NNTにとって中・上級レベルの会話指導においては、日本語の適・不適、あるいは自然・不自然を判断するなど、運用力に関わる面が不安な点としてついて回ることが、今回の調査結果からも示唆された。この点の支援も重要である。具体的には、判断のための方法や、学習者に対してどのように学習方法を示すか、などに関して考える場を提供したりヒントを示したりすることである。また、横山(2005:12)に指摘されているように、NNTのための教師研修の場では、自身の言語運用力向上を目的として設定されたクラスで学んだ体験を、教師の目でふり返って教授法の学習につなげる「体験学習」の場として生かせるようにすることが望ましいのは言うまでもない。NNT自身が、これまで経験したことがないものも含むさまざまな活動を積極的に体験し、その効果を実感できるような学習を経験した上で、そこで行われた活動の目的や方法、内容に関して、NNT自身が内省し、自らの現場にどのように、何を取り入れることができるかを具体的に考え得る場を意識的に提供すべきである。

〔注〕

⁽¹⁾ 国際交流基金「日本語教育国別情報2009年度」

<<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2009/china.html>>2010年9月8日参照

⁽²⁾ 下記の研修会受講者を対象にアンケートを実施し、有効回答のあった85名分をデータとした。

主催者：国際交流基金北京日本文化センター、高等教育出版社

受講者：「第4回全国大学日本語教師研修会」に中国全域から参加した199の大学の日本語教師206名。

開催場所：中国浙江省杭州市 浙江工業大学

研修期間：2009年7月19日～7月23日

⁽³⁾ 調査票は添付資料1のとおり。

⁽⁴⁾ 村野井(2006:64-87)に挙げられた要約、ディクトグロス(文章復元法)、ストーリー・リテリングを参考に項目化した。

⁽⁵⁾ ここでは科目を問わず、中・上級学習者を対象にした授業で、これらの活動を行っているかどうかを尋ねた。

〔参考文献〕

阿部洋子・横山紀子(2003)「2. 海外の日本語教育の視点から」独立行政法人国立国語研究所編『日本語教育年鑑2003年版』、23-33、くろしお出版

木谷直之・坪山由美子(2000)「研修参加者に見る非母語話者日本語教師の特性 —1994～1998年度の調査結果から—」『日本語国際センター紀要』第10号、69-87、国際交流基金日本語国際センター

久保田美子(2009)「ノンネイティブ日本語教師のビリーフ要因—インタビュー調査から共通要因を探る—」水谷信子監修『日本語教育をめぐる研究と実践』、185-210、凡人社

中国の大学の日本語授業における会話指導に関する調査

- 徐軍（2008）「日本語学習者のドラマ視聴に関する調査研究－深圳職業技術学院を例に－」『日本言語文化研究会論集』第4号、61－88、国際交流基金日本語国際センター・国立国語研究所・政策研究大学院大学
- 保坂敏子・奥原淳子・草野宗子（2008）「海外の非母語話者日本語教師の教材使用状況に関する調査－非母語話者教師が求めるもの－」『小出記念日本語教育研究会論文集16』、25－38、小出記念日本語教育研究会
- 村野井仁（2006）『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店
- 横山紀子（2005）「第二言語教育における教師教育研究の概観－非母語話者現職教師を対象とした研究に焦点を当てて－」『国際交流基金 日本語教育紀要』第1号、1－19、国際交流基金
- 冷麗敏（2005）「中国の大学における「総合日本語（精読）」に関する意識調査－学習者と教師の回答を比較して－」『日本言語文化研究会論集』創刊号、59－73、国際交流基金日本語国際センター・国立国語研究所・政策研究大学院大学

添付資料1

(3) あなたは、中・上級の学習者のための授業(科目は問いません)でどのような活動を行っていますか。あてはまる数字に○をつけてください。

1. 学習者が会話やニュースやドラマなどを日本語で聞く。 1 2 3 4
2. 教師が会話文や例文を日本語で何度も読んで聞かせる。 1 2 3 4
3. 学習者が授業中に日本語のテレビや映画を見る。 1 2 3 4
4. 学習者が日本語母語話者の現音にできるだけ似せて単語や文を言練習をする。 1 2 3 4
5. 学習者が日本語音声聞きながら、ほぼ同時にあるいは少し遅らせて、できるだけ正確に繰り返す。 1 2 3 4
6. 学習者が日本語音声聞きながら、繰り返す。 1 2 3 4
7. 学習者が日本語の会話文を音読する。 1 2 3 4
8. 学習者が日本語の会話文や表現を暗記して発表する。 1 2 3 4
9. 学習者が日本語の会話文を中国語に訳す。 1 2 3 4
10. 学習者が中国語の会話文を日本語に訳す。 1 2 3 4
11. 学習者が学習した文法や表現を利用したゲームをする。 1 2 3 4
12. 学習者が学習した表現を使った文を口頭で発表する。 1 2 3 4
13. 学習者が学習した表現を使って短い文を書く。 1 2 3 4
14. 学習者が日本語で読んだり聞いたりしたものの内容を口頭で要約する。 1 2 3 4
15. 学習者が日本語を聞きながらメモを取り、それに言葉を補って、聞き取った内容を日本語で発表する。 1 2 3 4
16. 学習者が日本語で書かれた文章を読み、その要旨を日本語でまとめて発表する。 1 2 3 4
17. 学習者が、聞いた日本語を正確に書き取って発表する。(ディクテーション) 1 2 3 4
18. 学習者が自由に日本語で会話文を作り発表する。 1 2 3 4
19. 学習者が日本語でロールプレイ(状況と役割りを与えられて話す活動)をする。 1 2 3 4
20. 学習者があるテーマについて日本語でインタビューする。 1 2 3 4
21. 学習者があるテーマについて日本語で意見や感想を述べたり説明や報告をしたりする。 1 2 3 4
22. 学習者が絵や写真や物について口頭で日本語で描写したり説明したりする。 1 2 3 4
23. 学習者が漫画やドラマのせりふを考えて日本語で発表する。 1 2 3 4
24. 学習者が原稿を作ってスピーチをする。 1 2 3 4
25. 学習者が原稿を作らずにスピーチをする。 1 2 3 4
26. その他() 1 2 3 4

「第4回全国日本語教師研修会」参加の先生方へ アンケートのお願!

(国際交流基金 日本語国際センター 木田真理より)

日本語教育における中・上級の会話指導に関する調査

本調査は、「話す」に際して、先生方の意識や実践に照らして、先生方が行っているものです。結果は、今後のワークショップの資料や教授法の研究に生かす目的で使用させていただきます。それ以外の目的には使用いたしません。また調査で得られたご回答・ご意見に関しては、完全に匿名性が保持されることを保証いたします。調査の結果を公表する際にも、個人が特定される形での情報は一切公開いたしません。どうぞご協力くださいませう。お願いいたします。

年 齢 : □20代 □30代 □40代 □50代 □60代
日本語教授歴 : □3年未満 □3年以上10年未満 □10年以上20年未満 □20年以上
日本語在籍 : □1年未満 □1年以上3年未満 □3年以上
日本語学習 : □主に中国の大学で □主に日本の大学で □その他
教授対象者 : □大学での日本語専攻 □大学での第一外国語 □大学での第二外国語
教授対象者 : □大学院での日本語専攻 □その他 ()

以下は、中級(約300時間程度)の学習が終了したレベル以上の学習者に対する会話指導について、お答えいただけるものです。あてはまる□に?をつけてください。

(1) 中・上級学習者を対象とした会話のための授業は、所属機関で設けられていますか。

(相談の時間に会議指導等を行っている場合も含む。)

□ はい □ いいえ (理由:)
□ 2/ハ □ 3/ハ

(2) 中・上級学習者のための会話の授業は、どのように行われていますか。あてはまるものすべての□に?をつけてください。

①教 師 : □中国人教師 □日本人教師 □その他 ()
②レベル : □中級 □上級 □その他 ()
③教 材 : □教科書 (名前:)
□その他 ()

④教師の日本語使用: □文法や意味の説明を日本語で行っている

□教室活動の指示を日本語で行っている

⑤会話の授業の目標: (具体的にお願いします)

例: 日常的な場面や問題なくコミュニケーションできるようにする 等

- (4) 次の活動は中・上級の会話力を伸ばすことに貢献すると思いますか。
 あてはまる数字に○をつけてください。
- | | 1. 知識が豊富 | 2. 知識が豊富 | 3. 知識が豊富 | 4. 知識が豊富 |
|---|----------|----------|----------|----------|
| 1 学習者が会話やニュースやドラマなどを日本語で聞く。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 2 教師が会話文や例文を日本語で何度も読んで聞かせる。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 3 学習者が授業中に日本語のテレビや映画を見る。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 4 学習者が日本語母語話者の発音にできるだけ似せて単語や文を言う練習をする。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 5 学習者が日本語発音を聞きながら、ほぼ同時にあるいは少し遅らせて、できるだけ正確に繰り返す。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 6 学習者が日本語発音を聞きながら、繰り返す。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 7 学習者が日本語の会話文を音読する。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 8 学習者が日本語の会話文や表現を暗記して発音する。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 9 学習者が日本語の会話文を中国語に訳す。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 10 学習者が中国語の会話文を日本語に訳す。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 11 学習者が学習した文法や表現を利用したゲームをする。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 12 学習者が学習した表現を使った文を口頭で発音する。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 13 学習者が学習した表現を使って短い文を書く。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 14 学習者が日本語で話したり聞いたりしたものの内容を口頭で要約する。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 15 学習者が日本語を聞きながらメモを取り、それに言葉を補って、聞き取った内容を日本語で発音する。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 16 学習者が日本語で書かれた文章を読み、その要旨を日本語でまとめて発音する。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 17 学習者が、聞いた日本語を正確に書き取って発音する。(ディクテーション) | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 18 学習者が自由に日本語で会話文を作り発音する。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 19 学習者が日本語でロールプレイ(状況と役割を与えられて話す活動)をする。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 20 学習者があるテーマについて日本語でインタビューする。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 21 学習者があるテーマについて日本語で意見や感想を述べたり説明や報告をしたりする。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 22 学習者が絵や写真や物について口頭で日本語で描写したり説明したりする。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 23 学習者が映画やドラマのせりふを考えて日本語で発音する。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 24 学習者が原稿を作ってスピーチをする。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 25 学習者が原稿を作らずにスピーチをする。 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 26 その他() | 1 | 2 | 3 | 4 |
- (5) 中上級の学習者が日本語会話力を伸ばすためには、学習者は日本語のどのような特徴について学習する必要があると思いますか。
- (6) 中上級の学習者の会話指導で難しいと感じる点は何ですか。具体的に書きください。

提出期限: 2009年7月21日 昼休みまで

ご協力ありがとうございました。